五升葬文草 巻二

蝶夢和尚文集巻第二目録

七老亭賦
湖水を西に望む賦
四菊の説
幽幕の巣の説
湯嶽三無の説
白氣の説
古老の名の説
牧法の辛の説
瓦金の名の説
犬城の名の説
瓦金の塔婆の説
茅草移実の説
伯養の川殺の説
阿弥陀寺禅の記事
亡親念仏の説
蓮華画像讃
夏祓の頌
歳首の頌
馬瓢の山家の頌

年賀の頌
悼蕉雨老人
生桑文仲傳
浮流法師傳

半後菊男送別
相雨の議
杉崔彭傳之傳

七宅亭之賦

一日吾友相雨の二法師を伴なひ来れり咲嫣よ世の
俗の斎怪今を詩人とわらふ人道半雨して天地
きものうし詩象山の上なる家よりの亭中の
七宅しるべくいつれの比なりし此亭の長老七人ちな
みと生ずるく習静の床しませよりいつるかの
七賢の家をとみ七賢の詩をかたりかたりしかひちなし
の桜手ほのぐらうれもよ雨も乗の屋山の甲
よりいつく方一町をうの同文をもるくいさう
鳴ちやまれ家おのれ歳の七ものよ光山の

うけとうたちく杉の中に咲これる花の精は
十七歳の流う流き前るさまい色のきぬと白帯て
はうはうかう如一夜の方を後日稽古く様くしたて
りかう人う神かも〜生の御とはぬは時う覺八年の
林よりのうる梅津う里の梅の香こうし杉の尾先
宮村の杉のみこう姫〜こうまこうる桂こうの
生の日新も撫育よう詞い中ちまうる杉よ又
なまし雪よりこう清く話なく雄う山のこれ
しめく青こうるる鹿伏う池のうう雪こる水う
後ふしすうぬこよこうなる入く右の方伏又乙

こう伏こうかこうこも生の天竹川う水上ふく山こく
こう谷深くせまりく水蔓ふる青く流れいる
尾上ふも大巡老の住生なし一夜ふこうこうこう
さこう伏祖こう伏栄行のこる山人うこうはまこう郷
きき生こうかすう山のこうひふう流き山う水こう流れく
やし乙氏生の多くこうこうりこの定同とふう
ここれ生こう伏こうしこうくこここうこうの人乳い
鳥ふの主のこかまりこかこうにわやここふ変生
ここれ伏情月ふやふこうこうこうこうこう上る毎の多る
かこ幕こうまいこう生のやまこうに行ふし留の

きこれのゆふへに我をましいふれ付しけれと逢ふかなれ
ならは舟にやしまつりしまうし押なりひく一つの舟より
さう絶男ともの腰に蓑うちまとひて扇をかきなる
あしなる網をたてうつりに柄杓持て水底をとくるに
れなて舟れさ紀に言ふるに口し笠ひの男ともの赤
ちなるに腰刀さして河水によろこふなる魚をとらへなる
はまれ鮨らの物を得なるくし我なる舟の舟ともなる
人四人をうり狭くさかしく申去詞まもせく舟を入に
漁りし杖はすまうち事しく紙にちつく絶えその
ちすへの舟や男女うちおしあくられうひかなるく

海ちうて白拍子にあまれ女の舟の中にあまりし舞む
ちあれり思ひなきなるされいこの河辺に諸か管絃の
舟をかへ人竹ひしいつへの舟せくよその体もをて
良たくひなしかの大納言の舟なり祥し人をいふはれの
舟にや楽しく同つに五節法河は秋も第五の舟まん
ちつきあそひかうしもいは河内奈は第一の舟の笑絃
なやうやおしくれしいつ前年道は網ひ河舟のいさ
おし舟あふにうしはむしくいかなるしくしいつさの
む侍いいけまての舟ひといつへ親をはる詩舟のさへ
管絃つくあしなうもなくれは第四の舟は破子取事う

ちぢきく所仮うらみあるとうらかうく定ゆれ
ちらくいちくはぬの物をいとをかうあうくはちあり
ずくなきよくうらてよくぬ

山ちくちくもの茂く毋中　所代
山さくく武士のあれくはく　吾朱
花ちくくはく水元ゆくあるうう　市厚
やく桜くゆい高も大井河　惟義

湖水に遊ぶ賦

まれの早よゆるも洞くくうに七夜業田ようう

しくくく神ゆ鳥居さく湖の中よ足えぬいつよちくい
ちく地仏御ゆ弟御ゆ乗のあくりの景をえむて御の人々
うちちくめきて一年の舟を漕出さに千葉多うよ中も
いくて網引業をかく業のいまあ武足くはくれく
仏御ゆ弟をくちくよくうい琵琶の海を海を
屋よあくくく神よりくく山やまく向ひくく同
弟枕をあくく流くゆに遠く日ゆの白辰ゆくて
ちくまく地みも水底の石出くく人のゆう道をあぬ
席うくきくく石ゆれい龍ゆ神ゆ巌ゆく人を
値くく岩窟ゆくいくも出れきれ岩の間と

白雪とみまがふばかりなる藤を流せるやうにかかるみなぎ
音に聞えしかつらぎ山の郭公ほとゝぎす鳴かぬ
山の湖水まんくせまくあるうち西方の岸の
柳よりの龍とかやいふものゆゑかやうに水の
流れの前なる吉野雷なるものゝ花ちる水のもい桜う
夕ばえ新しうてうつくしきれいの山の桜咲かゝいまさに
かの下流より来りしなるうの水う霧と花しき
陰に来るやうなれいつゝうの花の上の岸の上の社
うえをきたに出でゝ浦しして帯屋よいうの神の出
出でゝ桜各う宮なるれい寺猪ふとゝ出

ありうい山の嶽う西南う藤みゝ湖水い山飛ゝ
なるゝ花う寝ゝ人里ゝ大ゝいうゝ花みき世のゆゝ
なる桜も桃源ゝもいるゝかゝれ星ゝう火ゝゝなれぬ
人ゝ吹鶯ゝ八ゝの山ゝゝよゝ山きゝゝゝの浦辺ゝ
出ゝかれ飯ゝい海ゝゝかゝゝに人ゝ山ゝう行ゝゝぬゝて
湖水ゝ流ゝゝに智丸青寺の藤ゝ出ゝきゝゝの
みなきゝうゝゝ巨湖ゝ人ゝ肥地ゝゝゝう水の中に庵
ゝゝゝゝゝゝ波猪ゝ出ゝゝかゝ人ゝ薬ゝ泥送ゝ
藤ゝう蓮ゝの花ゝゝゝ西辺ゝ佛ゝゝゝゝゝゝゝ
蓮ゝゝ

雑送る佛のもとへ麻末加

やゝ長くゝ時うつきい是津の里入くゝかゝぬ宮ゝ

舟に漕ぎ入るに石山寺に晩詣はしまして法師の樹よ

ゝ入ぬ寺かゝるく寺ひろ日に出ぬ入ぬ

ゝ居ぬ山ゝ本坂居士の志望ゝ遊ひ七月廿九日

ゝ行ぬ名月ゝ取ゝ湖上寺に着くて夜ゝ

興ゝの加ゝくゝて時ゝ加ゝうゝに出ぬ寺ゝ

ゝ入ぬ清風ゝ山ゝ入ぬ山ゝ波も殆ゝ敷ゝ

以ぬ景色ゝ入ぬ田上山ゝ月の出ぬ山ゝ金の波ゝ

ゝに新市ゝ出ぬ入ぬ鳴瀬ゝ寄ゝ入ぬ清風

明月ゝ酒ゝ出ぬの話ゝ昔ゝ樹ゝ多の觀ゝ懷古

情ゝ出ぬ俳義ゝの就宮博ゝ病笠翁ゝ後ゝ

筆ゝ入ぬ湖上ゝ行ぬ入ぬ名月ゝ入ぬ

ゝ文城時ゝ死ぬ入ぬ

杯盤狼藉ゝ入ぬ

蘭紙始ゝ茂加ゝ

ゝ入ぬ世ゝ秋ゝ星ゝ樹ゝ苦ゝ入ぬ清風

吹ゝ入ぬ早ゝ田畑ゝ山向ゝ明ゝ入ぬ

一日ゝ水稲宮ゝ遊ゝ修行ゝ修ゝ聖ゝ中ゝ

加ゝ入ぬ行ぬ芦宮ゝ寄ゝ入ぬ入ぬ

三月の曉の清月をかたるしるべや

野菊の説

世に菊の花をもてなす人々ここに生まれつきて芽出し
初めより成長して秋のくれまで花培ふこの
菊の出来しと生れ出でしを崩しと生れ出でし
もの花にて生れ遠化の自然とこそ言ふ
まことに清みきよらかなれい沙汰なに生ずる
清らかなるせしてやはなもの秋の中ばの
ものうらの白菊のうつし植えしこの色をあらしこれ

ねうひ出でたるかの花の中のたるほのてを今の世と
ひらそまるて出の信逸とせしを人を今世の庭とくら
ものを花の富貴とやはこれを出でしこれを菊出
ものうこの聖業のをうこの四の時世の信よ家かの出
藩ばうれ半ばの遠ものして萩女郎菊のもの
めれもの信ばの市ばれを庭菊かのもの
きこの花をこの心をこの花女郎の形のもの
和の形の新ばの世出ばの家作の一物とやはこの
はこの出れこの生れこの家の
かのもの代を待ぬ迎よ山の神の悠ばの年の雑の

枝をみまくの菊ぬいてみまくと世の人うわや
しなおもてきき所の流れの色ぬのをきて除て
かれ不昇う苔を白ひもあるいるい葉う苔を
ぬをきぬやいるむ

九月を寄ぬよ又ぬ形四葉二月

蜂う巣の説

草庵の持仏堂を侍よ作うきかりかたいと
あく蜂の二つ来りく初るよ四しあを立て居り
しぬ石思後う思ひをあてこれい豆結ぬりの巣

あし出来ぬりの巣ぬ何う蜂の出よりあく同しぬ
立まりりく皆とやまひ抽きよりきれい又かより
蜂の三つ四つ来りく四しぬ拾よ巣ぬめくこと足て
ぬ形をや大さ鶏卵うきくぬなりぬきし人うよれ
きをひわれい新の色うりあく細穂ようきぬ
剱をうり蜂り出く人と出よりきすき虫をよを
て雪敷あくよ人ぬ言の下にきりて面をや拾しと
出きりぬりくうの巣の出来りし始ようぬ叩う之
又れい世の人う住ぬきりて信濃師よ地をう
ありの住達うりう石をきを拾を寄て弾ぬま

物をぬき出の行うゝ今の漢ちうゝ皆日元辰を
えゝみかゝゝの祝のとゝ式うゝ竹よまゝゝまゝ
妻よまゝ妻ゝ悦のゝて家年の長よおやゝゝと
いよ家かゝゝこの三つ蜂のいゝゝゝのかゝき月と
又てうゝ風巣成三つ蜜四つ蜜四つ蜜化ゝゝと楽ゝまを
刀ゝあのゝゝ物ゝく祝ゝゝ叩ゝ名お表ゝの
事事の事成みゝゝまゝてかのまと育てかゝうゝて
ゝくゝゝゝゝの巣成譲のゝゝゝゝ蜂巣の家の
ゝゝれ絶ゝゝし事成ねゝ蜂大化う巣ゝゝはし
事成会ゝゝゝれゝいゝう祝氏う立ゝり生草の

色うかゝれるゝゝまれいゝ人を迎ゝ長ゝ剣ゝゝれ食と
ゝゝゝゝ服ゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ就ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
千年家ゝもやゝう家ゝゝ深ゝて自ゝ巣ゝ孫ゝい
聖ゝう氏ゝ吟家ゝれゝゝいゝちの弁ゝう中ゝやゝちゝセ
ゝゝゝれいかゝゝ巣化ゝう成ゝゝゝゝゝ生ゝの生ゝ
ゝう祝のはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
智ゝのゝゝ成ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
巣ゝむゝ元て
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

と独はつやきあるゝ出まつよ馬ゐ幸い人も拝ろう
あるゝ佛の出行し給ゝ法ゝまゝて持佛の
前よさゝうりむく

湯鳴三世ゐ紙　　細馬木卯需

むゝ者ゐのいゝ佛よ宗祇法河宗也青柘ゐ二人と
奥ゝゝ湯の山三吹ゐ連歌ゐ中ゝ詩い山中の温泉
蓮二乃吹　襄伯老の梅ゐと心ゐ丸山中三笑也
紙詩を得ゝゝまゝ和さゝ　五月雨の比伊賀の柏俳
誘れて但ゐまゝ塩湯ゐ旅のやゐよ宗祇

ゝゐよ牧牛の色ゝゝ紙ゐよ蒲団のうゝゝね
情あまよ花ゐゐゐゐ花芋園ゐ屐也ゐゐ上人ゐゐ
年よ仙堂ゐ歌をいゝひ酒よ出ゝ葡のゐひみよ
為ゝ富ゝ人ゐ者紙ゐ水ゝ孤情ゝ言れ行ゐて
口紙の詩笑のゐさのにゐゐ三吹ゐ風流ゐ生ゝ花ゐの
三笑ゐ雅無ゐゐゐゐゐ三笑ゐ愛ゐゐゐゐゐ梅也の
西のさゐ也ゝ物の市のゐゐゐゐ科ゐのゐゐゐゐ
五月ゐやゐゐれゐ行ゝ一四ゐ木卯　　ゐゐ
年の浴衣ゐの紙ゐ拍牛　蜂美

白菊之説

海内の人民うつりかはれる国風寛政二十年一様之
人皆若狭ゝゝ牡丹ゝゝやの事を詩人の足あること
しかり蕣をもてすきまいをもとしてしかるべき入
加ゝ様に競へ色の妙なるかはりて異様ゝたに
もまゝ持ものと合を百合様ゝゝ敷のものしし
うすやいしゝたるゝ草木の妙なる姫ゝよ
見世無ゝゝ毛毋草石蕗ゝ度等の
ゝ紅孫の色かもしかるべき白ゝ切なる色を
ゝ人ゝ中ゝ等の新ゝて出ゝ人ゝ白菊なる

ゝ病ゝ仙ゝいゝゝゝ知ゝ人ゝ特ゝれ
特ゝ家ゝ家ゝ主ゝ人ゝて肩ゝ羽ゝ一ゝ大ゝ
持ゝおもかれ見ゝかゝ様ゝ白菊ゝ
ゝ色ゝいゝう常ゝ上ゝ珠ゝ品ゝ
満百歳則色白ゝ黄金精化為白菊ゝ唐ゝ書ゝ
ゝ我ゝいゝれかれゝゝ仙ゝ福ゝ神ゝ
いゝひゝくゝて変ゝあゝに引主ゝまゝゝ仙ゝ者ゝ
又ゝ家ゝ白菊ゝ名ゝ世ゝまれゝ人ゝ
ゝ人ゝ様ゝ白ゝ赤ゝ主ゝ明ゝ毛ゝ菊ゝ
ゝれい変ゝいゝ人ゝ赤ゝ主ゝ世ゝ俗年遠

岑なのまれまるの古を多知加

古聲しなつかしく説　俳後田房越智集

多和会きて琴しあるに中よ古の聲あるかの古聲
ひくして時あく今日は情よかなしと白居易の作り
けりしや芭蕉翁の風雅を作りきめて点石
賭ス世の中に俳諧の美なる者を多つあく俳諧
よりもしに変をよくせのうく俳流の手をちやや
まれまるれしておの名を古琴とする
此ちを扇よ古くしまする

枝法と号説　遠州濱松白輅需

永田行り別号枝法と号くこれ枝法と号くこれ
別号ナリ禄法ス道徒とのの大師を到して
和尚を度授ス一枝之佛法と称ス爾一語とも加
ら枝蕉門ス俳諧の道を一枝の伝流をしるすを
雪ぬ山く世の白ちまを梅の花

尾金と名つく説　伊勢柏原集

玉碑をしよりを多今ちを古をを詩客の古ちを

わう紙にてうきうし人きよしや石見しゆやう
ゆとかく世の中うゆ今かうしてゆい今日の俳雅あるこゝ
馬年ゆの年ゝそよきれけうゝ白上の名を改く夏全
名つく　きゝ紙うく驚しまゝ　すゝきゝ
あゆゆゝしゆの紙月よ祖翁の新年ゆよりつゝ製し
きゝ扇をきゝうく俳うゆ今武の設ゆけゝめんゝゆ
蓮ゆゆ流の行ゆゝ

扇ゆゝいゝ世ゆゆきゝてまつれ

犬をいゝゆ猫

てうきゝゆ里中に大きやうゆある犬の白毛をゆゆいゝ
きゝ年うゆゆかゝゝゆゆ年ゆきゝくゆゝ夏ゆゝ
曹ゝて疲ゝゝゆひよゆゆゆゆゆゆゆゆ累ゝゝて
喪家の犬のゝゝゝゝゝひゝゝゆゆゆれゝゝゆゆ今
きゝ門紙をゝて吼へ人をゆゝゝゆゆゝ尾をゆゆれけゝゆゆ
俳ゆれゆゝて一詩をゆきゆゆゆきて敬の書実をゝゝ
ゆ里よゆきゆゝく主の書代をあゆの蓮をゆゝゝゆ
きゝゝゆゝゝ紙時きゝゆれゝゝ人ゝゆ縄ゆゝ足を
けゆゆゝてゝゝゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夏ゝゝきゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

戸をかたくとじて居たりかの三條くるて居たるう
眠きまゝに成りもの語るしりとはのもやうて夫の
動転てかの語の言ふはれくるく咲くその俗れ
うしなふと立てよい念佛やまのあるしさるこの
耳にも語の言れよくも通しく夢と合てかきう
見たりまく諸毒消はくるあるなかしうまりとしのく
後世のこ考わきまへ言ぬ人をを遠て猪るてある
夕方といふ事菴よあるく猪をもれみるけも
われうまふ一杯をあるの伝法てかのかをかく
笑く座をけくひ五わかるまるの伝五を

をくなのまはまれ供物わられをえしりに
きに物くよりもあるねも志少をを書くく行先
堀るくしもはるくいなくく草の芝をあてられる
まくくめるれる生の一日二日を来るくいるあるく
るやくりあきまあるう厠の縄をまるて花
をくしもあるひてかのまに言ぬれなく
なを今ならもゆくを事の人うるまをさるし也
うしかめたしいまるも称名念佛う功法をかの
要報の罪のう遺宗伝をくしに即轉畜身うかく
五くひく説まるけのくも生利のて

[illegible]

元禄炉孫を嘆る辞

草庵のあるじうまれし初めなるものあり名れとつ
まて叩くに人とはなるべきもの今をかぎり二つのあり
一つは法華経なり又の名は阿弥陀仏の本願半入と
つの俗人の神とあり炉をあり仏を銅名と今まで
て後の世なのをまる魂よ第一のあれいやしくも
炉のあるかを手用のもの物しいるものと苦なむ男よ
うくしてなりのものの者もほぼ入者の

あるに月のあきらかなる庭のうちよりうく初めよりと魚
はなるを炭をうちの木根をもをみてかくを記のはきう
あるにわをあるうて

おるれいうよ生や七しれ小刀日

前草稿矢の辞　神仁杜口老人纂

世のあれを七年の年耳ありをうてあるられ世の
よりあるとなるのうをのの幸あるものと
や家よるれ神仁行ってあるを人てあるきれ
耳を叩のてくうをきは世のこの年をもって新

今はかゝるのゝ中に今年四月いとなまる
はゝ尊の菩提のこゝろゝにて此年ごろ書きさゝげ
給ふの書百五十卷ばかりに七十餘卷の數ばかり義淵
の文をゝゝめゝ拾ひ侍りゝ八十ばかりに成給ひ
ぬ

古歌

百歳にて二日やすらふ蜉蝣の命まつ
節分の初も七夕ゝゝ月見亭ゝゝ
よわゝまゝ成

ゆふぐれ草葉山や松のうち

伯菴とゆ移住

世のまゝ此里に加ゝ二十餘年を屬ぬまゝ蜉蝣
の浮世人ゝ人の時ゝ世ゝまゝ別被世人知住処
又移茅舍入保形し大林禪院ゝ寺まゝ
ゝて行ゝ菴ゝ寺の西ゝ山ゝ世ひ保ゝ世ゝ
トして加ゝのゝゝゝ菴を加ゝ名付ゝ記ゝに樹ゝ
ゝ植ゝ植ゝ世ゝ世ゝの伯菴ゝ名付ゝ世ゝの世ゝ
三界如旅宿ゝ世ゝ說ゝ孤のゝゝ生ゝに加ゝ
菴入留ゝ世ゝ加ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ
加の樹ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ

[illegible]

尚亦 [illegible] 山に月は [illegible] 年は [illegible] 行に [illegible]

[illegible] みなの [illegible] 人 [illegible] ぬ [illegible]

行 [illegible] 一夜 [illegible] 海 [illegible]

見 [illegible] 世 [illegible] 一 [illegible] [illegible]

[illegible] 佛 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

養 [illegible] [illegible] 三 [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] 一番や [illegible] 角

阿弥陀寺諸の記事

[illegible] 御 [illegible] 寺の [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] 佛と [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] 大 [illegible] 霊 [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] 雲と [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] 生の [illegible] [illegible] 梅檀

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] 草 [illegible] [illegible] 廉

[illegible] 犬の [illegible] 玉 [illegible] [illegible] [illegible]

[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

草創の年暦より開山の行業まで鐫勒せしなれハ
是非もなき千世の名をのこすよ随侯の飾ともなるべき珎
らし物なりけれ時の住持もハ無慚愧の僧なくその
請をうけ情なく商人のやうに法却せりけれにいたりて
佛寶をも茶毘する弥陀の像ハ穢させ給ひぬ僧寶を
掌中に住持の人をかく放逐なりし法寶をも如かの三思ひ
うけ請うて人かくのごとくなるやうにおもへハ遂に三寶滅せし
しぬかくもや住持にハ行なし住持に三寶にハいつもことも幸に
此法あうて如の住持の僧を駈擯せられぬことを得
不與共住の謗をまぬかれやはうよ弟子せしかの寺よ

住持職者自一如なりしかバさや我がまゝにつよやかなる
なく越しく堂そをこの寺ハ僧よ親しきなるがさし
しても請状法却しける罪業しれども買得く結表
まするが地傳を佛よわし知見し給ひつめあさられ僧ともを
かくしひてゆるく請の便状けくのハぬなくて死亡よの
よくよ寺の法寶としなきよしいのよこされも理よ分し
かく人ろ僧とすゐく法ともの寺財をあけむとよ
たるはうり穢ける寺のゆしよりまうし紀僧よの
いひこ訖なきしなれハ継よ其ありける衣鉢まてを
代なしてやるくよ諸人の数をこもして商人よ出し

諸を寺に加へ寺より敬ひ寺より供す
食をうとまれてあまし利をわれる商人のあるしの
商をきらひたれい常しまくてはのよ改悪あるい
聞くものあれ諸よりうしてすに流るの
商人とも公の加へ行しに従ひてたい寺に
加へ入ましといつよ聞なほその諸と法却せ
ひを見て教千等多今みて者まれよ出改よ
諸と古ひらりと見くはよ人のいるもあも
古の諸を加へ行て寺の諸まんまや仏法い寺の
世まのぬ日社わかりの白い寺道場よ物と旅り

出ぬ日ひとれ世のとけ物の諸まれ寺も乱ぬ
あか不過僧の侍よ古行やれそきれてあくの
しとわまぬいまうしまよ修法とあて
社しる諸云宝戒を我生寿に西元丘いまて
戒法と被るし師の弟中の男よしといま免
行のまいあうけ戒今日彼諸と生の寺に
入ま戒見く道のけまれわくるいおうはよ
諸まりく法先の成うを戒あく沒やまのあうり
仏法のまうめ戒寺に加いまう修法無僧のいま
けまれるま戒寺よう生前の新兵者よあるま

此御のちゝあるはゝをたゝうるあり又ゝ猶とまるゝ定や
はるゝたゝ思ひたるゝ猶とゝまるの晩うたあるゝみれ共

六赤念佛うた 辯

いつゝも手蘭盆会の間い都ちゝ和里より六赤念佛と
いつゝたゝあるゝ都の叮嚀とあるゝおのゝゝ手蓮
寺にゝゝゝゝひゝゝの出ゝゝゝ初の行ひきれ
生ゝゝゝあしかの拍とゝ又に初ゝゝ昔又祖とゝけ
あゝいゝゝゝゝ家ゝの門ゝあるゝひゝゝゝ
ゝゝ一人祖ゝゝあゝ者始ゝゝゝ光明遍照

いつゝたゝえゝいつゝぬゝゝゝゝゝゝゝ中あゝまゝいおゝの祖
ゝゝ敬一度ゝゝゝゝゝ神ゝひゝまゝゝかゝゝゝゝ獨
ゝゝゝゝゝ或ゝゝ敬ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ機ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さはまていふなる蛙かしけりしをりにも和歌は
常ならみける花櫻しまひて立春をめでし春のなき
目にもみえぬ鬼の影に世をかくれたるのみならず
わきわかしをいふて人の心しめて此道の秘曲よ
して鬼神を偲しめし物をしいふう思ひうなれ
なし紀するく思ひよするる人情をかよはしめて
又は後世善悪の為とて其身にも業識の種物となる
作れは是れなき心のまよひよくみるに尽きて一百首
を同じやうるのもすこしもかはりし作しは無益なるしたれ
をしもたに見き日数をもいつくして小詞くのせまやま

なくさめのためにけれはなくなしきなる世をは見えしとて女
まくのよのかたちかはきぬかす此君人なく馬車もなく
きゆるとくこゝろうて道ゆく人のかけしひかたる御し
さらにくも年よ一段極楽世界よりまわる精霊迎
出る微妙の音楽は此世のあはれなる耳にはそやはらく
うちそしや此はむけをくしこの文数語うちたはて
おもいうなる様くとみえたにおけける風雅の道ゆく
行のまいらみも奇き数多なしけすなみく李白杜
子美の詩みも定家西行の歌みも此まりしそのと
はなきいらよの鼻のわけうつゝめぐくりよまなきなす

[illegible]

蕉翁画像讃

芭蕉翁を相手とする俳諧の道なれば平宗房と呼ばれ
ける伊賀の柘植庄にうまれ柘植庄平宗房と
いふ名をもつて世に行はれ家を松尾

名字宗房といふ蕉翁氏は伊賀の国の業の人なれば
代々の道を好み拾遺抄より学ぶ一筋に出ず
まくるかのおよそ遠くとしてもうまの速筆をも
ゆるし山を収めまうしの雄うるはやまて詩を雪雲よりあり
遠よ年行く後七十うの俳諧の菴の芭
蕉と称わく芭蕉翁あれば羅漢ゆるもの
猶まやたう親想をうかべ和やしゆまく四十にう
まくく世の人第一神とぞ成年菴の中をかりけ
時宗成うわく例よりうまくまくよ行の中宅也
理成悟やや無所住の四のせうたり御斗歳

むかし禅の法を佛頂和尚に参して三國相承
続記にけしあるは風雅を西行上人をしたひて續
枝葉隠逸に載ぬ終に元禄七年十月十二日浪速の
客舎に卒し骸は粟津の義仲寺にうすめて
琵琶湖の波に古きをしたふ人あるべきか

雨乞祭の頌

ことし水無月雨降ざる事五十日あまりに及ぬる
土民是を見て日に夜に降らむことをいのれどもかくても
非なりの百姓らなけきしきてかくの如し　稲穂の
枯しくさりて瓜茄子のまゝにて立かれて見ゆる
垣の夕顔しほれて水をそゝぎてまで是を見る日に伸る蔓を
しも剃りは妻いとをし花子が氣を病むものゝ
あはれ終に水なれて程の情に湖あふれいかなる事
ならしてうし祈りの甲斐ある山の池に龍神のおはし
きあるに祈りて雨ともの わかせんとて里人うちはやす
かの岩に上りもさるに鐘太鼓の皷く神慮をと
すゝしめ奉るに都かくなはしての殿の心経をあげ
なりわい押柄に不物その踊を祈るものを聞よ
老て行のうや里人のいまゝ山とりしきりにやうく

東南のかたにあたれば岩や出かゆらしき此神も
下紀の神まうでけし地にまれしやうて帝も
早後なさしやうになりて雨気をかくねからず
や二時もうち降るにそみな人那にひく杵
家にも洒をくみ縁をはなく晩ひさしめまくえれ
我もえよまねば法師まで歌纓の縁を唄ひなしまま

まうらく此神のめぐみなりし

夕立ちや東れし草の菴まで

麦秋ひの頌

鯉風需

世にいはゆる三の麦ればよし冨士の山の三国一の名山なるを
是にはへ芸能の名もちあり青雲のなりあるいはさか
まて商人の事にやなるゝる女あるべし茄子は冨士の
色りて来り集ひよする女の麦葉の上より立つ麓の
中に罷りしをねしも表にはよるしうされもと更に三の子は
みし人ねまいちしみもいとし世に此扇子の手はくの
鳥の中にもたくましく達者なりし国の背れ穂のよ
より百姓の足をもまくも山ともいてかけ
免くり朝とも咲くともけれかきまわりくろからし
事に應じてまうかぬくめでなゆめあるべし

[illegible]

歳首の頃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

馬瓢の山家の頃　湖生平戸里中西氏

家を白庵賢の庵よりうつる門は八束穂の稲なるとなり　ありよりの詩の菊水山とはむしもあるひまるよ
わかい牛ゐきまれ　ゐあるうつ山里の　さうたの
かれ組境とも　いつ　ちよひ山家よりやうたに
あるしれうてあ　のまあやうたに　奥にて
家はるも山ゐのうつ　菊はみあ花うや

年賀の頃　筑前博多嵐魯需

筑前よ大果波の人あるう行形を名うれ博多出
津よりうくはる筑紫四時よりあ学の業をくとと

[illegible]人[illegible]たち[illegible]れかの仁洲の座うみうやまよ
孫[illegible]ひろく[illegible]所[illegible]ちやうに[illegible]ちやの[illegible]れ[illegible]
[illegible]よ[illegible]や代雅を聖徒愛[illegible]道[illegible]ひ[illegible]名冬
[illegible]ちの年賀[illegible]祝して[illegible]ちの[illegible]ように
[illegible]う素[illegible]れる賀[illegible]まれ南山[illegible]くはこかうも
[illegible]れをかのまよ氣[illegible]人う書[illegible]て一冊と
[illegible]ゆ[illegible]う[illegible]よかの[illegible]ち[illegible]学よかれ大
果[illegible]の人の[illegible]の人[illegible]やきしやられいち
集[illegible]人[illegible]やう[illegible]しきは[illegible]しや
花う時やまう[illegible]孫[illegible]人[illegible]のまう

豊後菊男送別

[illegible]居[illegible]変[illegible]ち[illegible]と書[illegible]ち[illegible]数のやうも多し
[illegible]よかの[illegible]ち[illegible]うの向よ旅の者まうけられも
かの[illegible]ひも毎[illegible]よ[illegible]う
[illegible]ち[illegible]ち[illegible]ち[illegible]ち[illegible]ちて
[illegible]のまう[illegible]ちも[illegible]て
[illegible]に[illegible]の海[illegible]ちて[illegible]や[illegible]
[illegible]ちは[illegible]ちり[illegible]れ心[illegible]やと[illegible]
[illegible]ちの[illegible]ちぬ
秋の[illegible]れまや門入[illegible]よう

悼蕉雨迷文

越前小宮山氏

五月四日二月はじめつかた作のあつまりにきたりし物語ありしうへ人のいとかりそめなる病ひ
にて終りしはつやきあるこゝろにて物かなしく男
教賢の津より蕉雨もとへ人うるかりきたりし告をする
使の者なりとて文ひらきしかはみあれし
ものうしろ四五行なるこゝろ懐ふかき文
なりとも憂世のもとつあられい一件のみもとをとゝ通て
先こゝ我ゐなたちこゝ用事仕舞次第上京こゝ会ふ
ものかな大病頻りこゝ元よりなきもの絶対なるこゝ

なりこゝ出発こゝ出立こゝ挑雑ものこゝ見こゝ元気なる
ものこゝ社中第五集時こゝ祝こゝ到着こゝ写生こゝ
一ふし孫振舞世の日出発こゝ時一家中よりこゝ小
冊こゝ追善集出こゝ雅序こゝ編集こゝ句こゝ歌賛こゝ
大雪こゝ戦尾こゝ中略人出発こゝ見こゝ出こゝ越こゝ出発こゝ同行こゝ
こゝ人こゝ一病こゝ人こゝ者こゝ入阿必居三日こゝ
忠内こゝ人こゝ出発中こゝ不幸こゝ物語こゝ尾こゝ臨終こゝ
こゝ人こゝ出こゝ人こゝ出こゝ人こゝ

三月八日　蕉雨

こゝ人こゝ西こゝ読こゝ日こゝ者こゝ訃報こゝ
こゝ人こゝ思こゝ出こゝ
こゝ人こゝ思こゝ出こゝ人こゝ

うつくしくして見し友は生し行ひぬしはよ
今ゆの枕にもさけつきて散れぬる萩の花の露の
人のしこ調の振舞は後世の営をなんみもおもん紙
詠の詩矣の道にあひて常はうち弧ひ辭かなく
からぬ人子もまつり世事子をとしお人と與きあれ
しにかられ一大事の期に為りしは空假をふれ
しましの後世まつへしと思ひしさにまつは随喜の
なきことにあらぬしせきにあかりし尊きあれと花鳥雅の
道あは心識しつてかつは悪れられもまつはけるは
またの道の因縁なれるかくて後の便りに浮世の[illegible]そ

蓮ぬくや病の床に全からの
しめえしにされはこれ弾指の間に彼岸の切仕他の
上にまゐり給ふ本意露うちの畏のれ麻もなく
國の人うなありてはいまの罷るまの堪へにさき昔語に
思ひ出ぬるしかし訓ようやましきみの果の日
あれいとて鳥羽の人と草菴にあつまり追善の
俳諧を興行し其の折りきる文をもて此句に
と遺くあらし此後生の後のひかられ

相雨の誄

かれ世を俳道に帰し雅の道に分入の旅を
もとめすまひきつるあのきり人の情を羈旅のうち
さすらへのかしこなる家々にたづね宿借る
人も多里の外にいとなく知る妻子も捨て
空も行くもむ書を捨て宝及び住除命絶時不随者と
説給ふこゝろ心の着なきもの旅なるこゝろ
わきまへしまこゝかの寺健に四つ時なるまで
及もあれぬ國に境を入るに隔きて初めて
山もあり一市のいとなく故の市し詠ることの表
をそなる事旅ゆく寺にまこゝのやわらぎ時に

門行く人を教へまゝ妙宝寺なるの山あり人家稀
禅門を敲けば山は旅なれぬて中に其秋のわ
ゝ踏まれぬ寺一所のあゆみなる知る家雑の砌と
そこのこゝはなもきぬ世の流蛍うらゆゝ時を作枝の
よなうかへてあるこゝあるを知る山に猿とおし
除ぶけいもと色きかゝるに知る殺雲者と
こゝもこせこゝ世年あさきうさるゝ宿今のちきりあ
五一日なれ寺のをれとこゝろうあやこかちにはあるこ
さへ行くあるこゝわ一いまこゝ山学あるこゝ寺のはるを
ゝ寺のこゝ思ひこゝのとこの月れこゝあかりく動ひ

きる浄土へ達しがれなるように祈うこせられたるか
なく餓死の金仏かくして
やもなくて元にかくりけるうの後

出来上州傳

出来上州は白井名を平次郎号義孝肥前長時うくきち
彼地の産業陶器の氏族なり学儒業に博く
書に於ては支那学に於きては詩学に於ては漢学と
して猛徒を利して都にあるに行くを夏ちと仕く
を官侍ついまいを進義と徳のく仕の雅と

学は鴨川の動に至護境相と行うまく吹城の小金
山の麓に別荘をいとなみ秋の広を
柳の前にとくかの五と前物舎に名付く薬の
四房ちのの如の三字は鴨の宝永元年の秋九月十日
没を墓を東山真如堂にあり今は前物舎に明和の
に於て再興をを
上州俗姓は内藤なり学尾張の国犬山の城主
武をなくは法を名なりて和海なりなきの
佛学は後に玉堂和尚の禅を法は奉を
辞して薙髪を偈曰多年負屋一蝸牛化做蛞

蝓得自由登宅最惶涎沫盡追尋法雨入林丘愛
原氏よきゆゑ紙雪のやうりゆゑ終よ死つと生て
湖南の粟津花ヶ岡に草庵を結ひ佛幻庵と号
芭蕉翁を宗祖とし朝夕おてかの花ちりて岡の重
なる義の感後山と生りて法恵を被きしよ
一石一事の法華経を書写して境と築く元禄十
七年の春二月廿四日病床に坐して悟を花の岡去
東林の中に葬り正秀ら墓を築きぬ

杉崔老伝之傳

十月十二日い何の粟津の寺の義仲の
て立給ふ生の形に寺に結入り給ひ紀氏の生の
の病ひ重くして中氣に成よりきれよりやきの
時々なむ寺まり行ひぬて家のうち立ちめて
きれて寺の絶ゆ立ぬ法に高
生人の生涯を寺の寿を伊藤の國に此
古田名い見良歸を資高先生に中きれ雅
名といい杉崔生人といい祝字を嗣よける学その奥
守よ法へ琴紙えて業に有かに此の都に
世学にてかの生紙きため國の名学にて書の

林月よりきこゆ格へ豪家うよせそうろうれ〳〵きく
今の世れもね識事物うはるるやよ代俗をみくこきの
十と有余りい海中うあるをを遂くきこの重撰流
の杖う作るよかくれ病よ接ゝく俸禄を辞し髪よ家祖
う香のうりの深く見よよよの格あのて物てひ幣の
小行よ新をうるね下十三年あり信濃をきるよ人
門ずよ市城あをを出の住居をへかゝうあゝいるん
山里ゝ常をかくれ雅のまを住
てゝ以月ゝの十二日い人ゝ城拝ゝ代鳥よりきゝ
きのくれい蓬門入内流姫ゝひ都よ行れゝむゝい

咲嘆よ去来ゝ今ををゝ松雀いまはくゝを迎ゝ
えゝ新されいけゝし信濃病の床よむゝ甲斐なき
枕の上ゝ世界の限ゝて迎よくゝて

行くくゝ月の光学のゝ生られゝ

ゝゝえゝをゝや一月のむゝしあゝるねきゝを
初月ゝ入いゝ山ゝ前よ姫ゝ移の道をれゝて
今思行ゝ何の社会を義重に請ゝ妙至の
礼奥いゝものやゝゝ山家ゝて去の月逝う代婦
ゝうゝるゝ思ゝいかゝ訪よ去ゝ語さゝく一月よ死の
世をひをゝうゝ格ゝ姫の得ゝあをを一元ゝの言葉を

つまづく迷福の道を引くく

法流法師傳

法流法師は名は法然の義なり俗姓は青山なり
あるよう学のもの城の人なり生れ西海道なり
を学び和文を書く代月のあるかの祝い芭蕉の
門人城人の要なるしるものの後ろのよりて
乳の巻をあるしるしるい一向専修の念仏と道義
を伝ふるとめよ後ろまれて元亨を思ひて
孫の栗津四郎義仲寺に葬る法師の

事は紀して元亨法師名は法然名は芭蕉の名
門をあつまりて行賀の方を各の常泉寺に行法を
名のいもり付ものつのの行ふ法師も
ゐ道のいろく富まれを移りや人いもの方と
あるこ名かめもしい言和りちやい年
ようとあるよ古城かきに学のまるをを
いつひく彦の聖は是百もの郷と書く帰度
のもめにあるひ名れの方やしう病をうく紙
要ういられるこき

血よあるく死ものはおん

みはてぬ　きく　多くの
肯肉日胞の雑おそ　むまれ
西也　病苦　うう　夏　うう
ゝ　ゝ　物の器　う　師の　う　人　生れ　ゝ　よ　生
除　拾　西　今　さ　成　告　ゝ　ゝ　一　切
道　門　の　凡　雑　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
遣　訓　ゝ　ゝ　今　者　う　人　ゝ　ゝ　ゝ　時　ゝ　天　明　二　寅
年　五　月　廿　八　日　に　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

拾華花